

21世紀の日本のかたち（101）

台湾紀行 2017年夏



戸沼幸市

< (一財)日本開発構想研究所 代表理事 >

1. 有形学会 in 台湾

2017年7月1日、有形学の勉強会が台湾・台北市の市長官邸、芸文沙龍（日本時代の市長官邸）において開催されました。有形学は故吉阪隆正先生（今年生誕100年）が提唱し、「人類が平和に暮らせるようにとの願いに建築・都市・地域・国土づくりにどのように貢献するか」を課題としたものです（理事長の部屋（50）参照）。日本有形学会と中華民国社區造学会主催、台湾市政府協賛となり、参加者は日本側30余名と台湾側100余名の集会で、一日中、熱心な勉強会となり、日本と台湾、そして東アジアのまちづくりについて、情報を交換して、日台間で交流を深めました。

私として、台湾の東アジアにおける地政学的な位置、台湾の地理、地形、歴史に重ねて、「台湾の都市更新の現況と課題」他を興味深く拝聴しました。日本側からの報告では、東日本大震災の復興まちづくりが台湾の参加者の興味を引いた様子でした。

勉強会の後、夜には場所を替えて懇親会が持たれ、私には旧知の友人達、早稲田大学など日本へのかつての留学生たちが幾人も来てくれて久々の対面となりました。

私が稲門建築（早稲田大学建築学科機関誌）の取材のため、初めて台湾を訪問したのは、

今から46年前の1971年でした。この時は吉阪先生と一緒にでしたが、台湾側は吉阪先生と同級の林慶豊先生が手配をしてくれて、大勢の方々とお会いすることが出来、当時の台湾建築について多くを知ることが出来ました（早稲田建築No. 5、1971年12月号に報告、稲門建築会）。

2回目の台湾訪問は、台北で行われた1978年の亜太地区都市建設会議への出席でした。この時も台湾側の関係者の案内で、台北、台中、台南、高雄とほぼ台湾の主要都市を訪れる機会に恵まれました。

3回目の台湾訪問は、陳亮全氏（前国立台湾大学教授、銘伝大学客員教授）が仲介者となり、1986年日本と台湾の都市計画学会との交流が発足した時でした。日本側は伊藤滋会長（当時）が団長となり、賑やかな交流会になりました。日台都市計画の交流については、現在においても台湾からの日本への留学組が大きな力になっております。来年は交流30周年になり、改めてこのための記念企画が進んでおります。

今回の「有形学会 in 台湾」への出席は私にとって久々の訪台の機会でしたが、台湾の都市・地域の発展ぶりと、これを支える取り組みの力強さを改めて感じさせるものでした。今回の訪台では台北市街地などの他に隣接の

宜蘭県において、地域に密着した建築・まちづくりに取り組んでいる建築家、黄声遠氏の設計した建築・まちづくりを拝見しました。黄声遠氏のアトリエには全台湾から建築、まちづくりをめざす若者が大勢集まって、熱心に共同作業を行っている様子に、国を問わず、同時代的なものと同感しました。また、象設計集団が設計した、南国に息づく宜蘭県庁舎は、沖縄の名護市庁舎設計の考え方を更に進めたものと好感しました。台湾と沖縄は隣接していることに改めて気付かされます。

写真1 「有形学会 in 台湾」の出席者



(有形学会参加者撮影)

2. 台湾・三都物語

2-1. 台北市街地見学と都市計画

今回の訪台では台北市・松山空港に近い中山区に宿をとり、台湾の友人の案内で徐々に台北の街を見学しましたが、高層建築が林立し、交通網が四通八達していると感じました。

高層化する台北の街でも最も高い建築、中

国の象徴である竹の形を連想させる「台北101」（地上101階建・高さ509.2m）の展望階から見下ろした台北市街地の広がり、今や台北市、新北市、合わせて600万人にもなるということです。超高層建築の足元には台北市政府、台北市議会、台北貿易センターがあります。

台北市街の景観は古い街並みを再開発しながら、建築の高層化、超高層化を進めていますが、その中でも中国の伝統的建築が散見され、都市の歴史を感じさせます。最も古い寺院である龍山寺、中国の英雄関羽を祀る行天宮などには多勢の市民の参詣で賑わっていました。市内のあちこちの盛り場には台湾(中華)料理の店が建ち並び大賑わいであり、「食の国」台湾は健在です。台湾の日本統治時代の建築、旧台湾総督府(現中華民国総統府)が今も当時の建築のままに利用されていることは、歴史的景観保存の意味で貴重なことと思えます。訪台の際にはいつも訪ねていた中国大陆の貴重な美術品を集めた故宫博物館の見学は今回割愛しましたが、台湾には中国の漢字が簡略されずに使われていることに合わせて、中国大陆の歴史的文化が保存されていることに気付かされます。

台北市に滞在中、数地区を見学しましたが、台北市の都市計画と課題について、これに関わっている陳教授からレクチャーを受けました。

図1 台北のシルエット



資料：台北2050願景計画初稿 中華民国都市計画学会2015年12月

写真2 高層ビル「台北101」



(戸沼撮影)

写真3 龍山寺



(戸沼撮影)

写真4 中華民国総統府（旧台湾総督府）



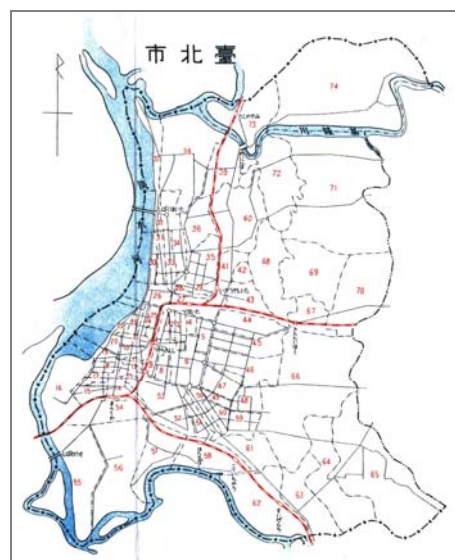
出典：http://www.morishin-web.com/photo/taiwan/soutokuhu/photo_soutokuhu.html より

台北市の都市計画

台北は1980年代まで、西側の旧市街地を中心とした一つの芯の都市形態であった。1980

年代に、東側の信義計画地区の都市計画が決定され、その地区の建設につれて、徐々に二つの芯の都市形態となった。1990年代前半、第2回の基隆河截彎取直（彎曲の河川を直線に改修する）工事が完成、地区の都市計画変更も行ったことによって、元来は住宅地であった内湖地区の開発が活発となり、特に、地区の道路建設の完成に伴って、2001年末に「臺北内湖科技園區」が発足した。今日には、約500haを超えた、ITのソフトウェア産業を主要とする業務と産業地区となった。さらに、台北市の東側に位置し、南港地区の大規模工業跡地再開発を中心とした、いわゆる「東区門戸」計画も、この二、三年に、積極的な推進が始まった。このように、二つの芯である台北市が、周辺の幾つかの地区の土地利用転換や再開発事業の進行に従って、多心型都市形態になりつつある。台北の都市発展ぶりは地下鉄路線の建設にも影響され、現在、地下鉄路線網は5路線（文湖線、淡水信義線、松山新店線、中和新蘆線、板南線）、総延長は136.6km、117駅に達した。

図2 日本時代の台北市略図（昭和10年）



出典：『台北市大観』昭和10年（復刻版）薫風

図3 台北市再開発地区

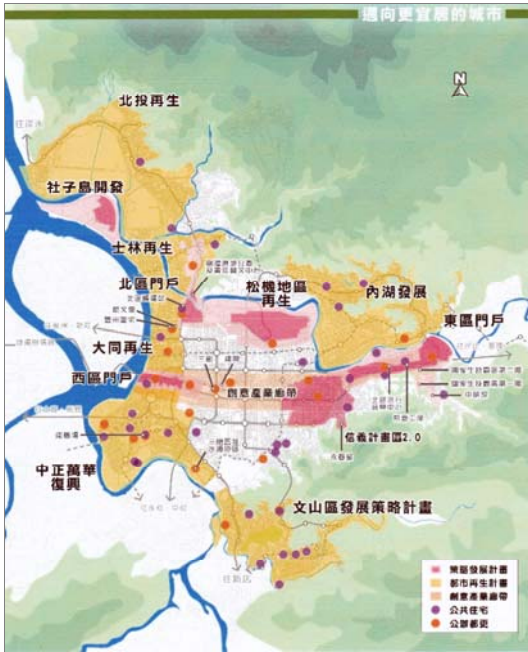
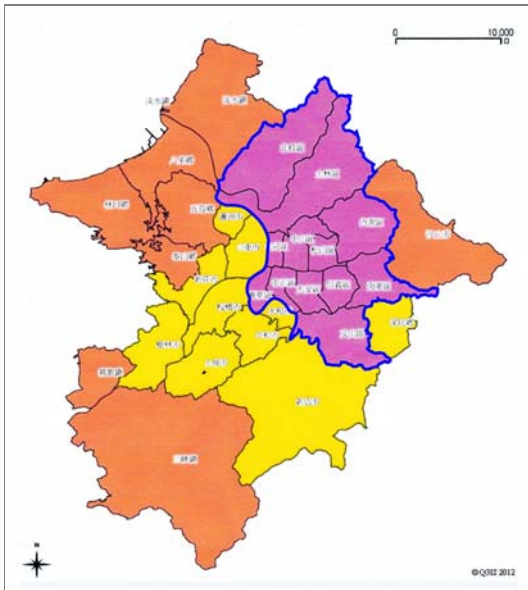


図4 台北市行政区域



注：太線（ブルー）は台北市の範囲

当面する台北都市計画の課題

- ①人口構造の転換：高齢化と少子化の人口構造をいかに転換するか。
- ②居住の正義 (justice) を講じなければならない：即ち、市民が負担可能な住宅、弱者

や高齢者をケアする公共住宅の供給が必要。

- ③社会変革 (social transformation)：民衆 (民主) 参加、オープンデータ (open data)、シティガバナンス (city governance) などのメカニズムを設けるべき。
- ④地球温暖化と自然災害の防止：居住環境の脆弱性 (vulnerability) が高まりつつある。
- ⑤グローバルとリージョナル競争：即ち、ネットワーク時代、新経済の趨勢により、産業発展環境の調整が求められる。
- ⑥都市構造の老朽化と土地利用の硬化：都市計画と都市空間の構造を全面的に検討し、調整すべきである。
- ⑦台北の特色ある空間美学が欠ける：台北の建築と景観は、エコロジカル思考と美学素養が欠けている。

なお、陳亮全教授の台北圏一極集中構造の改善案は、「台北圏市にある台湾省政府を台中・中興新村に移転させるべし」というものです。

図5 台湾の行政区画



2-2. 台北圈板橋副都心プロジェクト

今回の台湾滞在の一日、台北都会区の副都心、板橋地区の見学の機会を持ちました。案内してくれたのはその新板橋計画に中心に関わった、黄健二氏（前国立政治大学教授・中国文化大学教授）です。黄氏は1980年に早稲田大学で学位を取得しており、私とは旧知の間柄です。板橋計画の企図は台北都会区都心一極集中の緩和にあり、この点で日本の東京都心一極集中対策としての新宿副都心計画に似ております。

黄氏の板橋計画では、ほぼ直交する2軸、交通軸（都心、副都心をつなぐ）と中軸線（板橋駅、県政府、社教館、県体育館）を明快に設定し、広幅員の緑道を設け、この街路形態に合わせてオフィス群を配置するというものです。新板橋駅空間については、地下・地上2・3階に人工地盤を設定して立体的に組み立て、市民の集うイベント広場を設けており、快適な空間でした。

今回、黄氏と一緒に早稲田大学で学んだ范姜文誠君（修士卒）が同道してくれました。彼は台湾に帰ってから鉄骨組み立ての会社を興し、台湾の多くの高層建築を手掛けた実績を持っております。この間、日本の建設会社との共同事業も多く、この方面の日台交流に大きな役割を果たしてくれました。

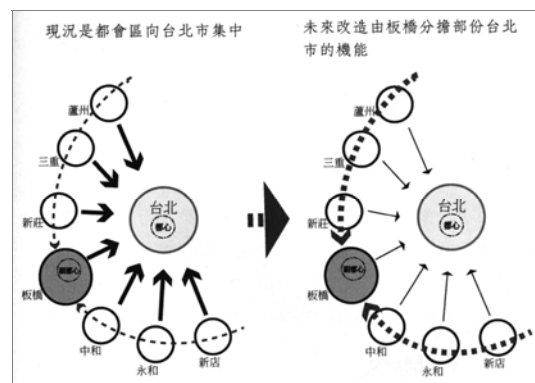
この日の夜はかつての日本留学生、黄教授夫妻、范姜夫婦、陳教授、李宜晋君と台北のホテルに集まって北京ダックに舌鼓を打ちながら、大いに話が盛り上がりました。

図6 新板橋車站特定専用区発展計画



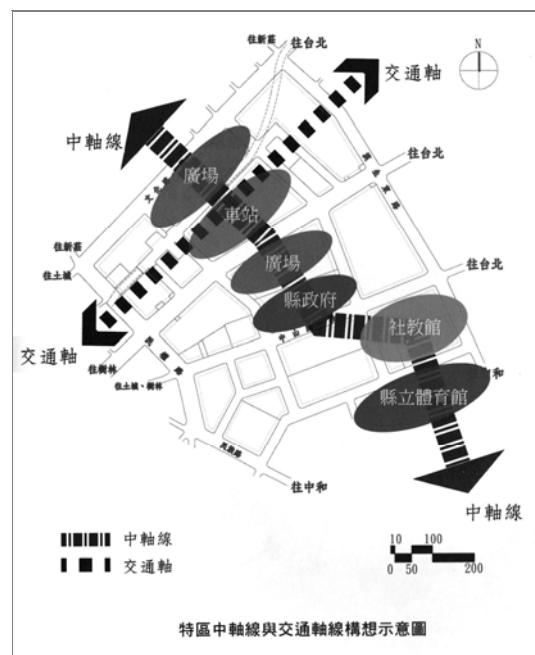
出典：『都市規劃設計的思考-新板橋車站特定専用區發展計畫為例』黄健二、2013年1月

図7 台北都会区空間架構改造構想図



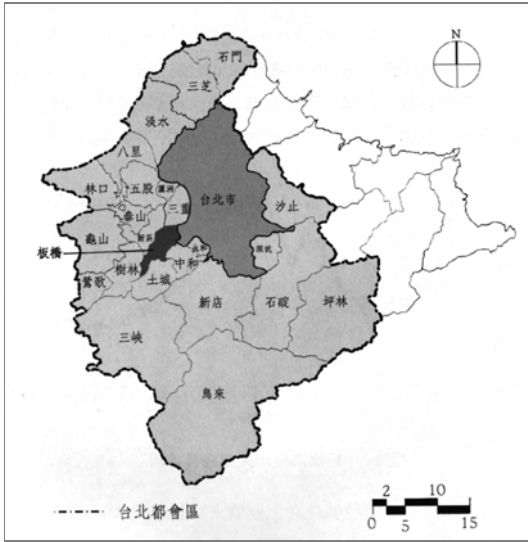
出典：『都市規劃設計的思考-新板橋車站特定専用區發展計畫為例』黄健二、2013年1月

図8 特區中軸線・交通軸線構想



出典：『都市規劃設計的思考-新板橋車站特定専用區發展計畫為例』黄健二、2013年1月

図9 板橋市位置図



出典：『都市規劃設計の思考-新板橋車站特定專用區發展計畫為例』黄健二、2013年1月

写真5 板橋駅前広場と中心軸



(戸沼撮影)

2-3. 日帰り圏になった高雄市

板橋プロジェクト見学の翌日、陳亮全教授の案内で台湾南部の高雄市を訪ねました。

高雄は台北駅から日本製車体の新幹線に乗って1時間30分の距離であり、台湾は日帰り圏となったことを実感しました。新幹線の車窓からは4,000m級の山々が連なる中央山脈を眺め、やがて北回歸線を越えて亜熱帯から熱帯地域に入り、南シナ海フィリピン諸島につながる高雄市に到着しました。

高雄新幹線駅には高雄市政府からの車が待

っていてくれ、市政府では高雄市の都市発展について、王屯電都市計画局副局长、郁道玲都市開発処長、翁浩建社区营造科長からの説明を得ることができました。

何しろ高雄の街は30年前の印象が一変しているのです。今や旧市街150万人に新市街120万人が加わって、人口が270万人を超えているのです。この30年間の変化の直接の要因は、港湾の輸送システムがコンテナに変わり、かつての工業地区も再開発されてオフィスやマンションに変わったことです。

市政府の説明を伺った後、旧港湾地区を見学しましたが、かつての倉庫街は街の文化・アートセンターに変わり、市民に柔らかな南国の憩いの空間を提供しておりました。高層オフィスや高級マンションも次々に建てられております。

高雄市の港湾地区の再開発は日本の横浜の例も参考にされたとのこと。高雄市の都市づくりにおいては路面電車や自転車道路が整備され、これは東京などよりも一歩進んでいるという印象を持ちました。

高雄市での昼食は、王さんや郁さんの案内で日本時代の木造家屋がそのまま利用されている茶店で頂きました。ここには日本時代の都市図などが置かれておりました。これを見ると日本時代、高雄においてしっかりした広幅員街路計画がなされており、これが新高雄市の計画に活かされているなど感じました。

30年ぶりの高雄訪問で印象深かったことは、この都市の建築の質が格段に向上したことと、東アジアに開けた台湾の港、窓であるということでした。高雄は21世紀、東アジア生活圏の一つの交流拠点になることでしょう。

図10 高雄市略図



出典：『観光の高雄市』昭和10年（復刻版）薫風

図11 高雄市街地土地利用



写真6 高雄市中心部（空撮①）



出典：『飛閱高雄』高雄政府都市發展局、2012年10月

写真7 高雄市（空撮②）



出典：『飛閱高雄』高雄政府都市發展局、2012年10月

写真8 倉庫をアート



（戸沼撮影）

写真9 倉庫街をアートセンターに



（戸沼撮影）

写真 10 日本時代の木造家屋を茶店に利用



(戸沼撮影)

3. 台湾の国土と人

3-1. 台湾の地理・地形

中国東南部福建省の対岸、幅150~200kmの台湾海峡を隔てて位置する島国。台湾本島と澎湖諸島などを含む80余の島からなる。

地形：4,000m級の中央山脈が南北に走り、太平洋側に急峻。平野部は東シナ海、台湾海峡側にある。面積35,982km²。台湾本島の中央部に北回帰線が走り、亜熱帯と熱帯の気候を持つ。

3-2. 歴史

- 台湾の原住民族

2000年前から原住民居住、東南アジア方面から台湾に渡来

- オランダなどによる統治

15世紀以来、イスパニア(スペイン)、オランダが台湾の地理的位置に注目

1624年オランダ、台湾南部に上陸、台南に築城。1626年イスパニア、基隆に築城。

- 漢民族、大陸南部から来台、本省人鄭成功 1661年来台。

- 日本による統治

日清戦争(1894~1895)後、清国から遼東半島、台湾、澎湖列島を割譲される。

- 1945年、日本の敗戦により台湾は中国に復帰。
- 1949年、中国共産党政権の成立。国民党中央政府台湾に移動。
- 中華民国時代~現在まで
- 台湾の経済成長 2010年 GDP 1万9000ドル(一人当たり)を超える。
(5,289億米ドル(2016年 台湾行政院主計處))

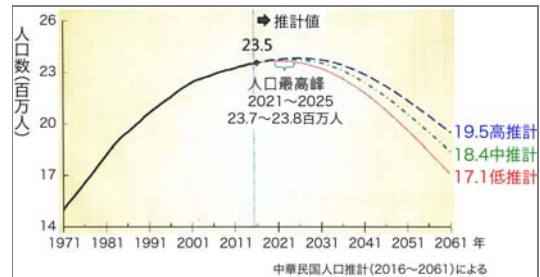
3-3. 台湾の人口

清治時期	300万人
日治時期 1905年10月	298万人
1940年10月	581万人
第二次対戦直後 1945年10月	約600万人 (日本人49万人を含む)
中華民国遷台後 外省人	121万人
1955年	922万人
2008年	2,300万人突破
2016年	23,514,750人

〈将来人口の予想〉

2021年~2025年 人口最高 2,370万人~
2,380万人
以後急減少に向かう

図 12 将来人口推計



(松本作成)

図13 台湾全図



図14 アジアの中の台湾



注：世界地図に半径1000kmの円を加筆
(松本作成)

3-4. 国土計画法と課題

(陳亮全教授による解説)

台湾では新しい国土計画法が2016年1月に発令され、同年5月から実施された。現在は、新しい国土計画を策定中である(法によると、同法が実施されてから2年以内に全国計画を、4年以内に直轄市、県の国土計画をそれぞれ完成し、6年以内に国土の功能分区(function district (法の第20条によると、国土は国土保育地区、農業発展地区、城郷発展地区、海洋資源地区に分けられる))の画定を完成すべきと規定している。

なお、全国計画では、主に全国的な方向、策略、原則及びガイドラインなどを策定し、実質的な計画は地方(直轄市、県)レベルの計画に譲る。

上記の新しい国土計画の策定中に検討された、台湾国土発展上の課題には、次のようなものが指摘されている。

- ①地球温暖化 (climate change) の課題：気温の上昇と降雨パターンの変化により、自然災害の影響が激化する。
- ②国土保育 (保護と回復) の課題：急激な都市化と建設開発の衝撃により、多くの生物ビオトープが破壊され、自然生態系に悪影響を与えた。
- ③農地保護の課題：農地の違法利用や過大農舎の建設により、農地が分割され、占用や流用がされたため、食糧生産の安全性も脅かされた。
- ④海洋資源の課題：海域 (海岸を含む) には、各省庁の事業計画や目的、関係法律規定が別々に適用され管理されているため、所管権利や責任が重なり、競合している。また海洋資源の保護不足と共に、高潮の強襲や

海水面の上昇による、海岸線の流出も課題となっている。

- ⑤城郷発展の課題：計画的に発展方向を導く思考が欠けているため、都市発展の整然性が欠けている。
- ⑥産業空間発展の構想が欠けているため、一部の工業用地の利用が低く、逆に新しい産業用地が取り難く、産業発展用地の供給が失調している。
- ⑦省庁、部門間の協議、調整の課題：省庁部門の建設事業が、事前に海岸地域の土地利用計画と協議整合していないため、国の重要建設事業の進捗が遅れている。

4. 台湾の未来—不連続体の連続

2016年5月、台湾の新しい総統（第14代）に民進黨の蔡英文女史がアイデンティティの高まる台湾の民意に支えられて選ばれました。

蔡総統の方針は、脱原発をも掲げていますが、民進黨の主張である「独立」を和らげて「現状維持」を求めるものと報じられています。中国大陸との関係については「兩岸は一つの家族—桐文哲台北市長」、「親中愛台—賴清徳台南市長」など、この領域での未来の在り方の表現が模索されている様子です。

グローバル化時代、地球上における人間居住の在りとして、国家論が先行するのではなく、地域における人間居住の現実こそ重視すべきと考えます。台湾は東アジア居住（文明）圏において存在感のある独自の居住領域を築いており、21世紀のグローバル化時代、この位置から光を増してゆくに違いありません。

今回私ども訪台の「有形学—世界が平和に暮らせる国のかたちを求める」in 台湾、としていけば、有形学のキーワード「不連続体（独

自性）の連続」といった関係の構築ができないものか。

東アジア文明圏における国の在り方の大きな実験場面に21世紀の台湾は置かれていると感じます。

【参考文献】

1. 『都市規劃設計的思考—新板橋車站特定專用區發展計畫為例』黄健二、2013年1月
2. 『飛閱高雄』高雄政府都市發展局、2012年10月
3. 『地球の歩き方 2017～18 台湾』ダイヤモンド社、2017年4月
4. 『平凡社大百科事典』「台湾」の項

(2017. 07. 25)